

コハクチョウの渡りについて

小西 敢

浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館, 098-5739 北海道枝幸郡浜頓別町

秋になるとどこからともなく渡って来て、湖や池で羽根を休め、水田などで餌を食べて冬をすごしている白鳥たち・・・

彼らは「冬を告げる鳥」「冬の使者」などと呼ばれ、その美しい純白の姿は、古くから人々に愛されてきました。時には、天女伝説や日本武尊の白鳥伝説などとして伝えられてきました。これらの言い伝えは、白鳥たちの渡りという神秘的なことから伝説化されたのかもしれない。

どこからくるのか

コハクチョウたちの生まれ故郷は、北極圏よりも北に位置する北極海に面した北シベリアのツンドラ地帯です。夏になるとチュコト半島から、ノルウェーまでのユーラシア大陸北部に広く分布し、そこで卵を産みヒナを育てます。冬になると東に分布しているグループが、日本や韓国、中国などのアジアへ渡り越冬しています。西に分布

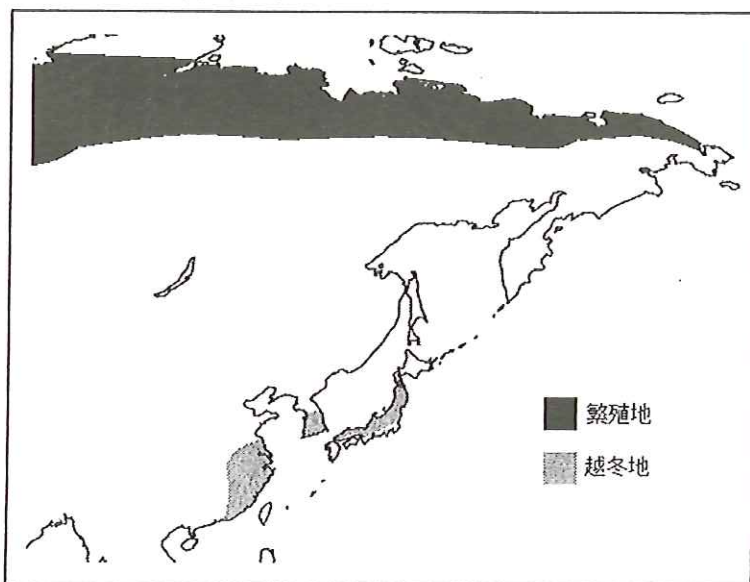


図1. コハクチョウの分布図

しているグループは、イギリスやドイツ、デンマークなどのヨーロッパへ渡っていき越冬します。

1970年代からはじまった白鳥類の標識調査から、日本に渡ってくるコハクチョウたちの繁殖地は、主にレナ川よりも東の地域ということがわかって来ました。また、渡りのルートについても少しずつ解明されてきました。

往復 8,000km の渡り

北シベリアで、子育てを終えたコハクチョウたちは、家族とともに9月になると越冬地の日本へ向けて飛び立ちます。7月に生まれてようやく飛べるようになった若い若鳥たちも一緒に渡りをするため、中継地で休みをとりながらの渡りとなります。

北極圏を南下し、オホーツク海に面したマガダンやオホーツクなどを経由し、サハリン北部のオハやアムール川下流域に集まります。繁殖地を出発した時は、家族単位だった群れの数は、南下しながらしだいに大きくなっていきます。更にサハリン南部のアニワ湾などを経由して、北海道の稚内大沼やクッチャロ湖へと渡ってきます。

北海道の北部に渡ってくる頃には、群れの数が2万羽を超えています。その後、石狩平野を經由して、本州各地を中継しながら、それぞれの越冬地へと分散していきます。約1ヶ月をかけて、片道約4,000kmの長旅を終えてようやく越冬地へとたどりつくのです。

1990年代からは、人工衛星を使った発信器の調査も行われるようになり、更に詳しい渡りのルートが解明されてきました。1994年と1997年に米子で行われた発信器調



図2. コハクチョウの渡り

査では、日本列島を経由するだけでなく、日本海を越えて大陸へ渡っているコハクチョウがいることが確認されました。

なぜ渡るのか

コハクチョウたちが、1ヶ月もかけて、遠い日本に渡ってくるのは、なぜでしょうか。繁殖地である北シベリアは、夏でも平均気温が10℃以下のツンドラ気候です。白鳥たちにとって、夏は涼しくてすごしやすいかも知れませんが、冬の気温は、零下50℃まで下がり、極寒の地域となります。水草などの植物を食べて生活している彼らは、水面が凍っては餌を食べることができません。そこで北シベリアの水辺が凍る前に生まれ故郷を離れて、仲間とともに日本へ渡って来るのです。北シベリアの冬に比べれば、日本の冬は過ごしやすいのでしょうか。国内では、山形県、宮城県、福島県、新潟県などの東北から北陸を主な越冬地として過ごしています。

コハクチョウの編隊飛行

コハクチョウなどの大型の水鳥が渡りをするときに良く見られるのが、編隊飛行と呼ばれるV字や一列になった飛行です。前を飛ぶ鳥の羽ばたきによって後方に上向きの気流が生じます。その気流に乗って、次の鳥が楽に飛ぶことが出来るという仕組みです。更に季節風などの風に乗って時速100kmもの速度で飛ぶことができます。いかにエネルギーの消費を抑えて渡りをするかということが、長距離を渡る鳥たちにとってとても重要なことなのです。このため、より多くの群れで渡りをすればするほど、後方についた鳥たちは、楽に渡りができるのです。では先頭の鳥は、いつも体力を消耗しながら飛ばないといけないのでしょうか。先頭の鳥も疲れたら、後方へ下がり先頭を交代することで、編隊飛行の渡りが成り立つのです。

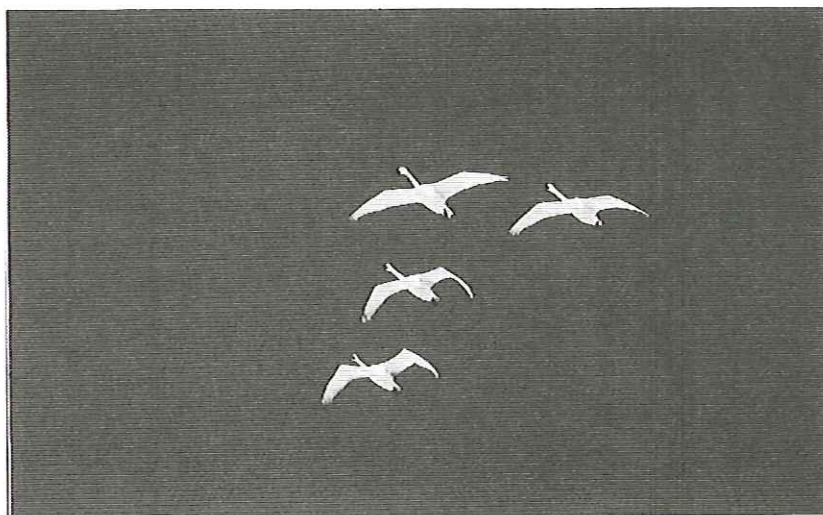


図3. コハクチョウの編隊飛行

渡りと家族の絆

コハクチョウなどの白鳥の仲間は、とても家族の絆の強い鳥として、知られています。それは、渡りをする時にも観察することができます。編隊飛行のときは、親鳥が若鳥の前方を飛んで渡りを助け、時には親鳥と親鳥の間に若鳥を入れて、群れからはぐれないように渡りをします。また、若鳥が群れからついていけなくなり、水辺へ降りると家族も一緒に水辺へ下りて、若鳥の回復を待ちます。そして家族で、一緒に越冬地を目指すのです。このようにして親鳥たちから教えてもらった渡りのルートを若鳥たちは、自分の子供たちへと伝えていくのです。

渡りと越冬地の変化

1970年代に日本で越冬していたコハクチョウの数は、約2,000羽でしたが、近年その数は増加しており、2007年1月のガンカモ科鳥類の生息調査（環境省）では、約42,000羽となりました。主な越冬地から、飛び出し新天地を求めて新しい越冬地を開拓するグループも現れてきました。また、環境の変化や給餌などによって、渡りのルートを変更することも見られるようになりました。

この他にも天候など理由によって、年による渡りの変化も見られます。2005-06年の冬は、関東や関西などのコハクチョウの飛来数が少ない地域や四国など飛来が稀な地域まで渡っていきました。主な越冬地の山形県や新潟県では、越冬数が減少しました。これらの変化は、豪雪や寒波の影響で、南下したものと思われます。2006年の秋は、暖かな気温が続いたため飛来が遅れ、急な寒波によって、北海道など北部を跳び

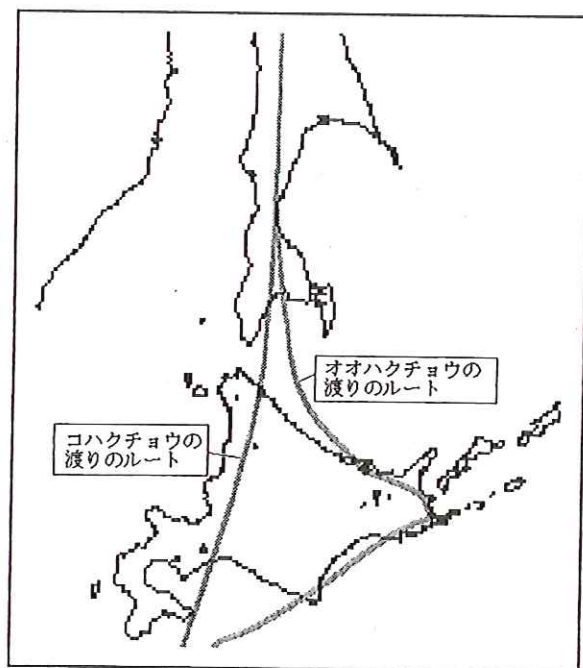


図4. オオハクチョウとコハクチョウの渡りルートの違い。

越して、本州に渡っていきました。このため、北の地域よりも南の地域の方が、初飛来が早くなるなどの現象が見られました。

オオハクチョウとの渡りの違い

コハクチョウと同じように日本へ渡ってくるオオハクチョウは、姿は良く似ていますが、繁殖地や越冬地、渡りのルートなど、多くの点でコハクチョウと異なります。コハクチョウよりも繁殖地が南で、越冬地が北になるオオハクチョウは、コハクチョウよりも渡りの移動距離が短くなります。また、北海道に飛来したときも、コハクチョウが北海道を縦に移動するのに対し、オオハクチョウは、道東を経由するため弓なりに移動します。

コハクチョウの北帰行

日本各地で越冬しているコハクチョウたちは、春になると北シベリアへ向けて、北上を始めます。南の地域では、2月下旬になると少しずつ北帰行が始まり、3月下旬には、越冬していた群れが全て渡って行きます。東北や北陸で越冬していたグループも3月から4月にかけて北海道へ移動していき、群れも大きくなって行きます。北海道北部のクッチャロ湖では、4月下旬に春の渡りのピークをむかえ、5月上旬にオホーツク海を越えてサハリンへと渡って行きます。秋のルートと同じようなコースをたどって、5月下旬には生まれ故郷へとたどり着きます。

北シベリアでの滞在期間は、4ヶ月ですが、コハクチョウたちは、生まれ故郷で子育てするために長い旅を続けるのです。そんな事を思いながら冬に訪れているコハクチョウたちを観察して見てはいかがでしょうか。